

# 福島第一原子力発電所の状況

平成 24 年 10 月 5 日  
東京電力株式会社

## < 1. 原子炉および原子炉格納容器の状況 > (10/5 11:00 時点)

号機	注水状況		原子炉压力容器 下部温度	原子炉格納容器 圧力*	原子炉格納容器 水素濃度
1号機	淡水 注入中	炉心ブレイ系：約 2.0 m <sup>3</sup> /h	34.7	106.0 kPa abs	A系： 0.00 vol%
		給水系：約 2.7 m <sup>3</sup> /h			B系： 0.00 vol%
2号機	淡水 注入中	炉心ブレイ系：約 5.0 m <sup>3</sup> /h	45.8	4.62 kPa g	A系： 0.12 vol%
		給水系：約 1.8 m <sup>3</sup> /h			B系： 0.13 vol%
3号機	淡水 注入中	炉心ブレイ系：約 4.5 m <sup>3</sup> /h	46.9	0.19 kPa g	A系： 0.22 vol%
		給水系：約 2.3 m <sup>3</sup> /h			B系： 0.22 vol%

\* 絶対圧(kPa abs) = ゲージ圧(kPa g) + 大気圧(標準大気圧 101.3 kPa)

・10/1 9:22 常用の窒素供給装置(窒素ガス分離装置B)については、累積運転時間が点検目安時間の 6000 時間を越えたことから、本格点検手入工事を実施するため停止。なお、本装置の点検期間中は、窒素供給装置(窒素ガス分離装置A)および仮設の窒素ガス分離装置\*による並列運転を実施。

10/5 その後、当該工事を終了したことから、8:38 窒素供給装置(窒素ガス分離装置B)を起動。10:17 同装置の本格運用を再開。10:27 仮設の窒素ガス分離装置\*を停止し、現在は窒素供給装置(窒素ガス分離装置A)との並列運転を実施。

※ろ過水タンクバブリング用窒素ガス分離装置

## < 2. 使用済燃料プールの状況 > (10/5 11:00 時点)

号機	冷却方法	冷却状況	使用済燃料プール水温度
1号機	循環冷却システム	運転中	26.0
2号機	循環冷却システム	運転中	26.6
3号機	循環冷却システム	運転中	24.6
4号機	循環冷却システム	運転中	30

\* 各号機使用済燃料プールおよび原子炉ウェルへヒドランジンの注入を適宜実施。

【3号機】・H24/10/4 0:18 頃 使用済燃料プールの塩分除去装置(モバイルRO装置)において異常警報(バッファタンク水位高)が発生し同装置が停止。同日 2:15 頃、現場を確認し、漏えいがないことを確認。念のため、装置入口の手動弁も閉操作を実施。引き続き、同装置内に設置されたバッファタンクの水位上昇の原因について調査中。なお、使用済燃料プール冷却系については異常はなく運転中。

## < 3. タービン建屋地下等のたまり水の移送状況 >

号機	排出元 →	移送先	移送状況
2号機	2号機 タービン建屋	→ 3号機タービン建屋	10/4 10:19 ~ 移送実施中
3号機	3号機 タービン建屋	→ 集中廃棄物処理施設 [ 雑固体廃棄物減容 処理建屋 ( 高温焼却炉建屋 ) ]	10/4 10:43 ~ 移送実施中
4号機	4号機 タービン建屋	→ 集中廃棄物処理施設 [ プロセス主建屋 ]	9/28 10:20 ~ 移送実施中

<4. 水処理設備および貯蔵設備の状況> (10/5 7:00 時点)

設備	セシウム 吸着装置	第二セシウム 吸着装置 (サリー)	除染装置	淡水化装置 (逆浸透膜)	淡水化装置 (蒸発濃縮)
運転状況	停止中	運転中*	停止中	水バランスをみて 断続運転	水バランスをみて 断続運転

\*フィルタの洗浄を適宜実施。

・H23/6/8～ 汚染水・処理水を貯蔵・保管するための大型タンクを順次輸送、据付。

<5. その他>

- ・H23/10/7～ 伐採木の自然発火防止や粉塵飛散防止のため、5, 6号機滞留水の浄化水を利用し、散水を適宜実施中。
- ・H24/2/23～ 6号機サブドレン水について、一時保管タンクを経由した、仮設タンクへの汲み上げ試験を実施中。
- ・H24/3/6～ 5号機サブドレン水について、一時保管タンクを経由した、仮設タンクへの汲み上げ試験を実施中。
- ・H24/4/25～ 地下水による海洋汚染拡大防止を目的として、遮水壁の本格施工に着手。
- ・H24/10/4 16:28 5/6号機滞留水処理装置の処理ポンプを起動したところ、当社社員が配管接続部近傍からの水漏れを確認。16:30 処理ポンプを停止。調査した結果、漏えい箇所の配管継ぎ手部に穴(3 mm×1 mm)を確認。漏えい場所は5/6号機北側の屋外(表面は砂利)で、近傍に側溝はないことから、漏えいした水は漏えい箇所の地中に止まり、外部への流出の可能性はないと判断している。漏えい量は配管継ぎ手部の穴から最大で約12リットル程度と推定。漏えい箇所下流における水の放射能濃度は、ヨウ素131:検出限界未満(検出限界値 $1.6 \times 10^{-2}$  Bq/cm<sup>3</sup>)、セシウム134: $1.5 \times 10^{-1}$  Bq/cm<sup>3</sup>、セシウム137: $2.4 \times 10^{-1}$  Bq/cm<sup>3</sup>であった。原因については現在調査中。
- ・H24/10/5 2号機原子炉建屋開口部(ブローアウトパネル)のダストサンプリングを実施。
- ・H24/10/5 2号機原子炉格納容器ガス管理システムのチャコールフィルタ・粒子状フィルタのサンプリングを実施。

以上